

大学生の箱庭療法過程に伴う観察者の主観的体験と制作者との相互作用について
- 観察者の関わり方の違いからの考察 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
瀬川 恵梨

本研究は、心理療法の一技法である、箱庭療法に関する基礎的研究である。従来の基礎的研究の課題として、研究の方法や成果と、箱庭療法の本質や臨床実践との乖離が指摘されている。このような課題に対応するためには、箱庭を通して生じる全ての現象を扱う「箱庭“療法”過程」を対象にすること、制作者の体験のみでなく、重要な要素である「研究者（観察者・セラピスト）の主観的体験」を扱い、制作者との「相互作用」についても考察する必要性があろう。また、基礎的研究では、臨床実践において扱い難いテーマを対象とすることも必要であり、「研究者の関わり方の違いと、制作者の表現や体験過程との関係」が、その一つに挙げられよう。それにより、クライアントとセラピストとの間で生まれた一つの表現である箱庭の理解が深まり、実践との乖離を埋めることにも繋がるであろう。

そこで、本研究は、箱庭療法過程に生じる体験や現象について、セラピストとクライアントの関係性を重視した形で捉え、臨床実践につながる知見を得ることを目的に行った。第一の研究では、大学生の連続した5回の箱庭の3事例を通して、箱庭の制作から、作品を通じた観察者とのやり取り（振り返り）まで、一連の箱庭療法過程に伴う制作者、及び観察者の主観的体験と、相互作用のプロセスについて考察した。第二の研究では、制作後の介入方法が異なる3グループ（各2名ずつ）を設定し、グループ間の差異を比較検討することによって、観察者の関わり方の違いが、表現過程・制作者の体験・相互作用にどのような違いをもたらし、影響するのかについて考察した。最後に、研究1・2の内容を総合的に考察し、箱庭療法におけるセラピストの役割と姿勢について検討を行った。

研究1の結果、観察者の主観的体験には、観察者は自身の主観的な感じ方によって、制作者の印象を作り出し、その印象によって自身の内面が左右される、表現の深まりを期待する、制作者や箱庭過程と、自身の主観的体験の関係を自問することによって、以降の関わり方が変化する、という特徴が見られた。また、相互作用については、過程において、制作者・観察者共に、何らかの不満や不安、抵抗が生じる、観察者の想像する制作者の体験や表現と、制作者の主観的体験との間に、様々なズレが生じる、最終回に向けて、両者の間に感覚的な類似性が高まる、という特徴が見られた。

研究2の結果、グループによって、表現の内容や変容のプロセス、自己洞察の有無や、不安や抵抗の在り方など、制作者の体験過程、観察者との共有感など、関係の捉え方に特徴や違いが見られた。

以上より、関わり方による影響が示唆され、セラピストの役割や態度について、重要な知見を得ることができたと考える。しかし、紙面の都合上、観察者の主観的体験のみに焦点を当てて考察を行った点、6事例のみの探索的な研究であり個人的要因の影響も大きい点で課題が残されている。今後、実践活動を通して、さらなる研究を積み重ねていきたい。